

原 著

賀川豊彦のソーシャルワーク ー『貧民心理の研究』と1919年の転調ー

KAGAWA Toyohiko and the social work in 1919

近藤 哲郎

要約：賀川豊彦の貧民窟における救済事業は歴史的には著名だが、そこで賀川が何を達成したのかについてはそれほど明確ではない。そこで、賀川の初期の文献に基づきつつ、その貧民窟移住の動機に即して、貧民窟における賀川の実践をあらためて捉えなおし、1919年以降きわめて現代的なソーシャルワークの実現していることを明らかにする。

Key Words：賀川豊彦 貧民心理の研究 ソーシャルワーク セツルメント

序

本稿の目的は、賀川豊彦の『貧民心理の研究』（1915／大正4）がどのような構想の下につくられ、貧民窟での実践にどのように反映されえたかを賀川自らが語る資料に即して概観するとともに、賀川の実践が文献的には1919（大正8）年を境として転調し、きわめて現代的なソーシャルワークが実現していることを論証しようとするものである⁽¹⁾。主に使用するテキストは、『貧民心理の研究』を中心に、『賀川豊彦初期史料集』所収の1910（明治43）年の日記から1930年代前半にかけての貧民窟あるいは社会事業に関連する諸文献である。ところで、『貧民心理の研究』は、ごく大まかに言えば、賀川が貧民窟で観察した事実の記述と理論的説明の部分からなるが、言うまでもなく、後者は当時の知見や理論モデル、あるいは一般的な思考パターン等歴史的諸条件に大きく限定されざるをえない⁽²⁾。そこで、この理論的説明の部分も含め、『貧民心理の研究』を成立可能にした諸条件については別途検討することとし、本稿ではもっぱら賀川による事実の記述のみをデータとしてその実践の再構成をはかりたい。すなわち、賀川の実践を客観的に復元するというよりは、むしろ賀川自身が見て、感じて、考えたこと（共感）を通して、100年前の賀川豊彦の貧民窟における実践をわれわれ自らが追体験しようとする

試みである。

I 『貧民心理の研究』の基本構想

さて、賀川豊彦が「荷車の上に私の凡ての財産ーと云っても、蒲団と書物と衣類四五枚ーを積んで」、神戸葺合新川の貧民窟へ居を移したのは1909（明治42）年12月24日である⁽³⁾。賀川はその動機を宗教上の確信ばかりでなく、研究のためであると述べている。《宗教上の確信》については、フレデリック・モーリスの《化身主義》こそが宗教家として、そのスタンスの根本にあるべきだとする賀川の確信ではなかったかと推測されるが、今は触れない⁽⁴⁾。むしろ、『貧民心理の研究』との関連で重要なのは《研究》である。では、貧民窟へ入った賀川は、いったい何を目的とし、何を研究しようとしたのだろうか。

移住当初の賀川にとって、「知らぬ貧民窟へ突然飛び込むと云ふことは、岩見重太郎〔諸国を漫遊してヒヒや大蛇を退治したとされるヒーロー〕が探検か冒険に出かけるのと少しも変わったものでは無い」。それで、「私の岩見重太郎の冒険には、いつも丸山と一緒に居た」。丸山平吉は貧民窟の住人で、賀川もこの男には「相当の犠牲を払った」が、それでも「貧民生活に熟練して、色々の問題が起っても平気で受け流して行く丸山は、私が貧民窟の生活法を研究するには是非置いておかねばならぬ」存在だった。つまり、貧民窟へ入った当初から、《貧民窟の生活法》を研究することは確かに賀川の目的の一つだっ

たのである⁽⁵⁾。

移住から1ヵ月後の1910（明治43）年1月26日、賀川は貧民窟生活の辛さを綴った詩を日記に書きとめている⁽⁶⁾。

「思うて狂ひ、折って狂ひ、たゞ魔にさゝれたようです。…
思ったやうな勉強もできず、思ったやうな伝道もできず、
奇蹟も起らず、半鐘も鳴らず、平凡で、平凡で、
それに不潔な貧民窟の一壁の色、鯨の肉の色、年中乾いたことのない、
道—いやだ—臭い—便所—道側の室と云へば破れ障子—…
天井の埃、雨戸の埃、思ってもいやですよ。
生活に慣れないとつらひ、
それでも、一月は早や貧民窟の生活をしたのでしょ。
ア、恐ろしいベスト！…おとめがベストで死んだのだと、
ア、恐ろしい。あなたにも伝染（うつり）しますよ。
さあ、お逃げなさい。貧民窟はうるさいでやう。
泥溝、鯨の腐肉、便所—
お、私の心は全く狂っちゃった。…
人間が貧民窟に住んで何の役にたつ？
心にとうとう狂ひがきた。…（中略）
また思ふと、また狂ふ。貧民窟を救ふに道はないものか？」

慣れない貧民窟での生活に苦闘しながら、ともかくも《貧民窟を救ふ道》に思いわずらう賀川の姿が見てとれる。

ところで、この「貧民窟を救ふに道はないものか」から半月後（移住から1.5ヶ月後）の1910（明治43）年2月16日の日記に、賀川は『狂熱伝道者覚悟』と題する文章を記し、そこに《救霊団事業》として11項目の事業プランを書きとめている。いわゆる貧民窟における賀川豊彦の救済事業だが、その内容は「1. 安料理、2. 無賃宿所、3. 子供預所、4. 資本無利子貸与、5. 医薬施療、6. 葬礼部、7. 雇人口入部、8. 日曜学校、9. 小供理髪・小供入浴、10. 慰安部、11. 日曜説教及水曜祈祷会」である。ところが、この事業プランは二年後の事業報告に記載された実践とはほぼ同じである⁽⁷⁾。ということは、賀川のいわゆる救済事業は貧民窟への移住当初から、あるいは少なくともそのひと半月後には既に構想されていたプランの実行であって、《貧民窟の生活法》の研究や《貧民窟を救う道》の探究とは一応別個の、むしろそれらに先立つ事業プランだったのである。つまり、貧民窟における賀川の実践をもう少し正確に描写するならば、当時の賀川は貧民窟の人々への救済事業に従事しながら、同時に、その実践を通して、あるいはそれと並行して、貧民窟の生活法や貧民窟を改善する方法を

研究していたということである。

その傍証として、『狂熱伝道者覚悟』の事業プランから半年後（移住から8ヶ月後）の1910（明治43）年8月26日の日記に、当時視察旅行を予定していた賀川の《東京にて研究すべき要目》というメモが残されているが、そこには当時東京にあった貧民窟と代表的な支援組織や人物が網羅されており、これは明らかに《貧民窟を救う道》の探究を窺わせる資料である⁽⁸⁾。

つまり、貧民窟において、一方で当初からのプランである救済事業を実践しつつ、他方で貧民窟の生活法や貧民窟を救う道の研究を進めていた賀川の最初の到達点、貧民心理の研究、すなわち貧民窟を改善するための有効な施策は、貧民窟の人々の心理的特性に根拠をおくものでなければならないとする観点の獲得である。「如何にして最も人間らしい救済制度を設けたいと考へましても、…これはどうしても今までの様に経済と経営ばかりの慈善事業や社会改良策では無くて、一層心理的な、一層人間らしい、人間中心の科学的のやり方があるだらうと思へるので御座います。そしてこの出発点は、どうやら貧民心理の研究にある様に考へられるのであります」。そして、これ以降、賀川は貧民窟の人々の典型的な行動パターンに関するデータを収集し、それをその心理的な傾向、すなわち感覚、感情、意志の一般的な特性として分析し把握することを当面の課題とする。「例へば、ここに宗教家がある。一個の貧民部落を改善せんとする。その時に、彼はどれだけまで精神生活の唱導により、どれだけまで物質の補助と改良によらねばならぬか等の問題を解決するは、全くこの貧民心理学によるより外にないのである。…で、もし之が貧民心理学によって全然解決出来るならば、社会改良家は長年の経験によって一被救護者を取扱ひ得ると云ふ様な煩はしさがなくなるのである」。つまり、そのように把握された貧民窟の人々の心理的特性を基盤として、必ずしも「社会改良家の長年の経験」に頼る必要のない、十分に経験的（科学的）な根拠をもつ普遍的に有効な救済策を探ること、これが『貧民心理の研究』を必要とした賀川の基本構想であったといえるのである⁽⁹⁾。

II 救済事業の実践と貧民心理の研究

それでは、貧民窟における賀川の実践とは具体的にはどのようなものだったのだろうか。『貧民心理の研究』

には救済事業についての記述はあまりない。言うまでもなく、それが貧民特有の心理を経験的に把握し説明しようとするものだからである。しかし、貧民窟の人々の行動パターンを記述するなかに、当時の賀川の実践も所々垣間見ることはできる。そこでまず、貧民窟における賀川の実践、すなわち、いわゆる救済事業は具体的にどのように実践され、その実践のプロセスにおいて賀川は貧民窟の人々の《心理》、つまりその行動パターンをどのように捉えていったのかについて、先に触れた救霊団の事業プランに沿う形で資料を整理し、ごく簡単に把握しておきたい⁽¹⁰⁾。

〈無料宿泊所〉

「全く無料宿泊所などと云ふ看板もかけているわけが無いので、一年半も無料宿泊どころじゃなく、^{ただ}只で食って学校へ行く子供もあれば、近所で蒲団が無いので泊りに来る人もある。…之で三十人以上のものが一ヶ月以上居たでしょう。^{そのほか}其外無料給飯は二十名以上に渡り、大抵二週間以上食ひに来ます」。もう少し具体的にはどのような実践だったのか。「私の家は間口が二間〔3.6m〕、奥行二間の、表三畳に、奥三畳の…至極簡単な家であった。家賃は一日七銭で、毎日かけて行く…之では私と丸山兵吉爺と、病人の安井と三人が住むには余りに狭いので、私は二軒置いてもう一軒をすぐ借りた」。丸山兵吉とは賀川の《岩見重太郎の冒険》を共にした男である。「この男が私には親切で、約二カ年間私と起臥を共にした。…彼に食はすものが無いので、三度の食事を二度に減らし、着て寝る蒲団が無いので疥癬^{かいせん}を患って居る彼と一緒に寝て、私も皮膚をばりばりかいたものである」。

では、この実践、つまり自分の家で貧民窟の人々と同居しながら、賀川はその人々の心理（行動パターン）をどのように把握していったのか。たとえば、「私の世話して居た或^{ある}貧民の子供は腹をたてた時、数百頁ある聖書を一頁一頁皆引裂いてしまった。又もう一人の私の世話した貧民の子供は私の貴重な書物を数冊ページ^{おそ}の真中より裂いてしまった。貧民の子供の復讐心程懼ろしいものは無い」。また、「私の宅にも、誤って人を殺して監獄から出て来た人が二三人居ったことが有る。彼等は皆臆病もので…私が留守だと幽霊が出て仕方が無かった。私は彼等の日常の行為を見て、人を殺す様なものは、日常は悪人では無くして、全く性格が連続しないものであると云ふことを知り得た」⁽¹¹⁾。

〈病者保護〉

無料宿泊所を提供していると、「来る人も来る人も重病患者であるには全く驚きました。私は病人の中に坐って悲鳴をあげました。多い時には五畳の家を五軒かりて、十六人のものが寝て居りました。…私は充分金も無いし、勉強もしたいし、貧民窟の研究もしたいし、その当時は余程弱ってしまひました」。ある時、「おみつと云ふ全身不随意の乞食を私が世話していた。そのおみつが糞便で汚した衣服を洗濯して裏に干してあると早や見え無い。その後またおみつの着物を干すとまた見えない。二、三日たつて、例の前科九犯の泥棒の息子が雨が降るからと云つて米を貰ひにくる。ところがその子供がおみつの着物をきて居る。その弟はとみると、之もおみつの着物をきて居る。黙って居ると、平気なもので、その後度々その着物をきて、うちへ使ひに寄こす」。また、「貧民程食欲に陥り易いものは無い。…淫売の鬼のお梅と云ふ私の家で死んだ女などは、死ぬ日の朝、握飯を三つも四つも手に握って死んだ」⁽¹²⁾。

〈葬式執行〉

貧民窟では「死んでも葬式が出来ない。…彼等の葬式を見て居ると人間とは決して思へない。或^{あるもの}者は蜜柑箱につめられ、或者は茶箱、燐寸箱につめられて火葬場へ行く」。この《語るさえ恐ろしい》状況を、賀川はマスコミを通じて社会的にも問題化しようとする。「その当時〔明治43・4年頃〕は随分神戸新聞を通じて市民に訴へたのですが、誰れも直接に行動を共にしやうと云ふものもありませんでした。それで最初の年は十四、次の年は十九の葬式をしたことを覚えて居ります」。ところで、食えないから《貰ひ子》をするという女があった。「その女は一月であるのに単衣^{ひとえ}を着て居りました。勿論蒲団もありませんでした。…赤ん坊はその後一ヶ月位は生きて居りましたが、…たうとう二月の始めに死にました。それで私は、今度はどうするであらうかと見て居りましたが、死んで第一日には…死骸を抱いたまま寝て居りました。第二日目に行っても、そのまゝ死骸を抱いて寝て居りました。それで私は、もう見るに見兼ねて、私も金が無かったが、質に置いて葬式したのです」⁽¹³⁾。

〈医薬治療〉

「前田医師と江澤医師へ毎月十五名以上送ります。八月〔明治43年〕は薬代四拾円払ひ、十月は十六円払ひました」。ある男は「一年半も脊髄炎で寝て居たものだが、

私が祈って立つことが出来る様になったと、奇蹟を信じたい貧民の心理から、私の信者となったので、…私のお加持がよく病気にきくと云ひ出した。そして…祈ってもらうために、私に病人をつれて来た。そして病人は多く癒された。癒されないものを、私は前田と云ふ医者へつれて行った」⁽¹⁴⁾。

〈資本貸与・生活費支持〉

「十七名ばかりに資本金百拾数円を与へました。…其他一年間リウマチスの一家族に米を日に五合平均に与へましたもの、壱円以上与へたものも大分あります」。たとえば、立木という男は賀川の支援で餅売になったが、破戸漢に「大抵一日に売上高の一割か、一割五分はたゞで食はれ」、それで全く悲観してしまって今度は賀川を刃物で追いまわした。また、「金井おさわは可哀相だからと思って尋ね…米と金とを残して尚改心するならば出産まで補助すると約束して帰ったが、…その後づうと淫売に出て、腹の子は流産し、よくなると何処となく姿を隠した。…こんなわけで淫売婦の改心と云ふことは何かの事情が無ければ殆ど不可能なこと、云っても善い」⁽¹⁵⁾。

〈職業紹介〉

「日雇人夫五十名、下女二人、然し之れは進んで致して居りませぬ」。なぜなら、「貧民窟に落ちて来たものは到底一事業に従事することが出来ぬ者と思へば間違ひは無い。私はあれこれと試みて見たが…何をさせても駄目である。技量も無ければ、努力もなし油取る【怠ける】ことが上手で、命令を聴かぬと云ふのだから手におへぬ」。だからといって、「怠惰者の多くは決して仕事を厭ふものではない。意志がその観念に伴は無いのである」。賀川はこれを《執意遅逡》と呼び、《意志薄弱》、《意志の休止》、《虚無主義》と言い換えるのだが、たとえば「彼等は便所へ行く執意が遅逡する【意志が休止する】ので、庭へ小便をする。…衣服が破れたら破れたまゝ捨て、置く。綻びを縫ふ執意を欠いで居るのである」。要するに、「とても中流階級の人々の様な持続的な意志運動を機械的に出来ないものと見えて…だから私は、貧民窟の中年者を善い工場に世話することを絶対に拒絶して居ります」⁽¹⁶⁾。

〈日曜学校〉

「私の考へて居るのは、貧民窟を救はふと思へばどう

しても貧民窟の少年を救はねばならぬと云ふことである」。そして、それは《人格の陶冶》による。これが日曜学校、すなわち宗教教育の趣旨である。ところが、「貧民窟の子供は低能児の如く取扱って調度善い処がある。五分間と注意を得やうと思へば余程の努力がいる。彼等が意識を放散させて居るのは著しいもので、…大声で説教をして居る所でもその声も耳に入らぬかの如く平気で説教者の回りで遊ぶ」。また、「日曜学校へ参りまして、僅か十分とたゝぬ中に四人位泣かすことは、なんとも思つて居りませぬ」。結局、「家庭的に訓練なく出入りの甚だしきことおびたゞしく、之を陶冶するは甚だ困難なり」ということであつた⁽¹⁷⁾。

Ⅲ 実践のガイドラインとしての『貧民心理の研究』

さて、以上のような賀川の救済事業は、先にも触れたように、『貧民心理の研究』ではほとんど言及されてはいない。しかし、その実践を通して賀川の把握した貧民窟の人々の心理的特性（その力、強み、弱点、困難）は、貧民窟の人々に対する救済事業、つまり、今様に言えば生活支援の実践に何らかの指針を提供するものであることもまた事実である。そこで、そのような実践的な観点から賀川の記述したデータを分類し、貧民窟における実践のガイドラインとして役立つものを取り出してみよう⁽¹⁸⁾。すなわち、われわれが100年前の貧民窟へ入って、そこに居住する人々の生活支援に従事しようとするならば考慮すべき実践の指針である。

1. 「貧民に対する言語、作法は最も注意しなくてはならぬ」

「貧民の心理の中で特に注意すべきは…妙な所にひつつかゝつて多少なりとも世話してやらうと思ふ者を大に困らす感情のあることであります」。たとえば、「淫売婦に、淫売と云ふても怒らぬが、飯が食へ無いのか？と尋ねると、死物狂ひになって怒る。また、《顔》を潰されると云ふて、とても考へもつか無い喧嘩をする」。また、破戸漢に冗談で金を貸せというと、「もう早や怒つて居る。人に金が無いと思つて恥をかかせやがると来る」。それに、「彼等の間には迷信と伝習のもの忌みがあつて、それを破つて自由に言語を使用せんとするなどで彼等は必ず怒るのである」。だから、「貧民に対する言語、作法は最も注意しなくてはならぬもので、彼等は少しの言葉

使ひ、少しの作法によっても非常に怒る」のである。

一般に、「貧民は理由なくして怒る」。「彼等には怒りの状態がヒステリー的に持続して居るので有って」、「入浴して居って一寸と水がかゝったと云って怒る。睨んだと云って怒る。足を踏んだと云って怒る…」。「しかも、「貧民の憤怒の興奮情態は実に凄いもので、大抵は家具一切を破壊しつくす。…貧民で二日三日位つゞけて怒り狂ふて居るものは決して少なくない」(『貧民心理の研究』1915(大正4)145p, 148p, 「貧民心理について(二)」1917(大正6)823p)⁽¹⁹⁾。

2. 「善人の様に柔和な人でも貧民窟では決して気を許してはならない」

「善人の様に柔和な人でも貧民窟では決して気を許してはならない。…或時は柔和で、或時は人を割く様な激情を發する…。貧民一般の傾向がそうである」。たとえば、「今柔和に話を聞いて居るかと思へば次の瞬間には刃を呑んで、脅迫してみたり、今笑って居るかと思へば、次の瞬間に於ては泣いて居る」。それも「反射的のみであれば、こちらの言行を慎んで居れば、それで済みますが、分裂的であるために、彼等自身何を仕出かすか自分手に【自分で】わから無いので」ある。しかし、「そう激変するからと云っても、…複雑な情緒から出るのでは無く、たゞ簡単な一本道を屈りくねると云ふだけの話で、…金を借るために或時には柔和に、或時には怒って見る」だけである。但し、破戸漢は「危険だからあまり寄せ付けることが出来ない」(『貧民心理の研究』1915(大正4)129p, 191p, 「貧民心理について(三)」1917(大正6)958p)⁽²⁰⁾。

3. 「この人なら大丈夫だと信用していると背負投げを食われる」

貧民窟で孝行娘として警察から表彰されるような者が「自分の宅を賭博の盆屋とし、自分も賭博を打って」いたり、この上なく親孝行な《おしか》という四十女も「淫売が悪いと云ふことが少しもわから無かった様でした」。それ以外にも、貧民窟には「人の善い人が沢山ある。…処がさて、此等の人々が何時も善人かと云ふとそうでは無い」。「三ヶ月四ヶ月は善人である。その中一日だけ夫婦喧嘩をする、賭博をする…。そしてまた翌日は元の善人となって居る。そして今度は一年も善人で居る。そうして居る中に又破れる」。だから、「此人なら大丈夫だと信用して居るとボカンと背負投げを食はされる」。「彼等の意志は連続することが出来ないのです」(『貧民心理の研究』1915(大正4)130p～131p, 「貧民心理について(四)」

1917(大正6)1058p)⁽²¹⁾。

4. 「三時間や四時間は面白くもない同じことを聞く気でなければ成功しない」

「貧民の意志の研究をして一番面白いのはその回転である。彼等は実にくだい、繰返し繰返し同じことを云ふ」。「私の近所の淫売の盆屋の主人は夫婦喧嘩して私が女を隠したと云ふので私のうちへ暴れ込んで来た。すると今度は悪かったとわかって二時間程の間に同じことを並べて十二、三度繰返して謝して居た。或時に私の向へに夫婦別れをすると云ふ喧嘩が有ったが八時間ぶっ通しに同じことを喋りつゞけて闘ってゐた。…同じこと云ひ、同じこと云ひ、わかり切ったことを折返し折返し喋りつゞける」。「それで貧民窟の喧嘩や破戸漢を処理しやうと思へば三時間や四時間は面白くも無い同じことを静かに聞く気でなければ決して成功しない」(『貧民心理の研究』1915(大正4)168p～169p)。

5. 「説教は決して彼等を動かし得ない」

「貧民の意識は明かに普通民の意識と違って居る」。たとえば、「彼等はよく夢で泣き、夢で怒る。そして醒めた後には全く現実の真理として信ずる」。そのようなわけだから、「いくら知識を以って説いても彼等の道徳的行動を齎して反省せしむることは出来ない。説教は決して彼等を動かし得ない。擲るか、抱くか、その二つの外彼等を反省せしめない。…それで私は破戸漢に向つて嘗つて説教したことが無い。私が破戸漢に暴れ込まれた場合には唯時間の経つのを待つばかりである」(『貧民心理の研究』1915(大正4)197p～198p)。

6. 「貧民はよく嘘をいう」

「貧民はよく嘘を云ふ。…出鱈目放題のことを並べるのが《貧民の嘘》である」。それで「嘘をよくつくものだから、仲々他人の真理を信じない。然し本は信じる。貧民は本に書いてあるものなれば、小説でも皆ほんとの事を書いてあるものだと思つて居る」。また、「一日冗談半分に日を送り真面目の判断が全くつかないものがある。木賃宿に住んで居るMと云ふ男は…私に一度として真面目な応待をしたことが無い。どこからどこまでが冗談やら薩張(さっばり)わから無い。…或時も式拾銭(ある)で或仕事を命じた処が、それを先にくれよと云ふ。先にやると仕事をしないからと云ふと、そんな事はないからと例のじゃらついた句調で云ふ。それで私は信用してそれを与へると、

鉢巻して今するからと云って逃げて帰った。貧民のうちには此種類の人々が頗る多い」(『貧民心理の研究』1915(大正4) 124p～125p, 150p)。

7. 「貧民は感謝しない」しかし「感恩の念を忘れてはいない」

「貧民の多くは感謝と云ふことを知らない。親も感謝しなければ、子にも感謝せよと教へ無い…。然しそれにしても貧民間にも偶には心より感謝を知って居るものもある。それでも一割と見積れば多過ぎる」(『貧民心理の研究』1915(大正4) 149p)。

さて、以上は概ね『貧民心理の研究』を中心とする指針である。それに対して、以下の指針は1919(大正8)年以降の文献からとり出したものである。両者を比較すれば、賀川の提示するアドバイスに明らかな転調がある。すなわち、「私の最も親しい老婆に《猫の婆さん》と云ふのが有った。…八十になっても、癪氣があつて痙攣がくる。その度に私を呼びに来る。…それで老婆は、私に感謝の印として、色々なものを塵箱ちみばこの中から持ってくる。…またお玉と云ふ乞食の妻は、少し低能だが、感謝の心で、濱からジャガタ芋〔ジャガイモ〕を拾って来て持ってくる。食うてくれと云ふのである。…然し之で如何に彼等が感恩の念が強いかわ分るであらう。日本の貧民は感恩の念を忘れてしまふ程ほど墮落したものではない」(『貧民窟の二疊敷より』1919(大正8) 51p)。『貧民心理の研究』に比して、貧民の行動パターンを積極的に評価(respect)しようとする賀川の姿勢に注目しよう。

8. 「小さい約束でも守らねばならぬ」

「凡て、貧民窟の仕事は小さい仕事一心を使って注意と親切を要する仕事が多いので、大まかにこなすつけることが出来ない。貧民程小さいことに凡てひがむものは無いから、このひがみを取るために、無理な要求を聞か無い様にすると共に、一寸と引受けたことは直に、小さい約束でも守らねばならぬ」(『貧民窟十年の経験』1919(大正8) 160p)。誰しも喜んで支援を受け入れるわけではないという事実をふまえた上で、貧民窟の人々の信頼を獲得し、支援そのものを可能にするための指針である⁽²²⁾。

9. 「貧民は尊敬と愛で近づくべきものである」

「貧民窟にも…同情されることを好まない自我があります。…貧民にも《顔》と云ふ道徳がありまして、一度

施米を貰った以上は顔がたゝなくなるのです。それで同情で無ければ貧民を救済出来ないと思ふ様な無謀なことを考へて下さるな。…私は貧民窟に十年住んで、日一日貧民を尊敬する心が高まるばかりです。貧民は尊敬と愛で近づくべきものです」(『貧民窟の二疊敷より』1919(大正8) 48p)。もはや貧民窟の人々は尊敬(respect)されるべき存在である。いやむしろ、貧民を尊敬できなければその支援は可能でないとする指針である⁽²³⁾。

ところで、賀川の貧民を尊敬する心が高まるのは、貧民心理、つまりその行動パターンの中に貧民窟の人々のもつ力(strength)を見いだし評価するようになるからである。たとえば、「《おしか》と云ふ三十女の淫売婦の如きは、…親子三人を女の細腕で養ふことが出来ず、たうとう淫売婦になったものの、彼女が子と親に尽した努力と奮闘には同情と尊敬の涙が自然に流れ出た。…私はその友人となって、淫売婦の尊敬すべきを知った」のである。また、「私が讚美せざるを得ないのは、…貧民同志が相互に助け合つて居ることです。…貧民窟の博徒が入監でもすれば、徴兵にでも行く様に騒いで、皆で同情して差入をする」。「病氣だと云へばうるさい程親切してくれる。…どんな病人でも世話してもらえる。…どんなものでも相互扶助する。…乞食して居る様な貧乏人が、バナナを持ってくる、蜜柑を持ってくる」。それで、「貧民窟程仲善くなる所は無。…おばさん、今日はウチ飯焚かずや食はしてくれんか?と云へば、食ふものが無くても食はしてくれるのが貧民窟の俠氣と云ふものである」(『貧民窟の二疊敷より』1919(大正8) 48p～50p, 『貧民窟十年の経験』1919(大正8) 160p)。必ずしも貧民窟の人々の行動パターンに変化があったわけではないだろう。ただ、賀川のその行動パターンを捉える仕方が変化したのである⁽²⁴⁾。

10. 「救済するのではなく、友達としてそこに植民するのでなくてはならぬ」

「私自身の理想としては、貧民窟の撤去にあるけれども、今直に貧民窟が無くなら無いとすれば、貧しい人々と一緒に面白く慰め合つて行きたいと思ふのである」。そして、その実践は、「救済するのではなくて、友達としてそこに植民するのでなくてはならぬ」。「私は、過去満十年間に貧民窟で大きな仕事をしたとは思はぬ。ただ、貧民窟で可愛がられるものとなったと自覚して喜んで居る。また貧しき人々も、私の処へ来れば、慈善家から受ける親切と違った、友人として相談が出来ると云ふこと

をよく知ってくれた。それで凡ての相談を持って来てくれる」(『貧民窟十年の経験』1919(大正8)163p～164p,「セツルメント運動の理論と実際」1926(大正15)41p)。このようにして、賀川は貧民窟における過去10年間の自らの実践を《セツルメント》として捉えかえす。

「セツルメントは必しも救済事業の団体ではない。だから、直接救済事業に指を染めなくともいいのである。たゞ親切に救済を要する事件の起った場合、それを各々の場合に応じて、それぞれ救済機関へ連絡したらいいのである。例へば、老衰者のある場合は、養老院なり貧民病院へ、孤児は孤児院へ、肺病人は結核療養所へと云ふ工合に助けを要する人々を親切に取扱って他の救済機関へ報告したらいい」。「そして、その界限の社会事情を絶えず観測し、之を調査して発表したらいいのである。失業者のある時は失業防止運動もやり、進んでは孤立の労働者間の連絡を計り、労働の組織を計るのである。そしてエライ人物があれば、之れを重じて、先へ先へと進めるために力を籍すと云ふのでなくてはならぬ」(『セツルメント運動の理論と実際』1926(大正15)54p)⁽²⁵⁾。今のところ貧民窟における従来の救済事業、つまり生活支援の諸施策が根本的に変化することはないだろう。しかし、《支援》という実践がどうあるべきかについての賀川理解とスタンスは確実に変化しているのである⁽²⁶⁾。

跋 …『貧民心理』とは何か

見てのとおり、賀川豊彦の貧民窟における実践は、『貧民心理の研究』の段階からゆるやかに変化し、1919(大正8)年を境として非常に現代的なソーシャルワークとなる。しかし、そもそも賀川が自明とし⁽²⁷⁾、『貧民心理の研究』がターゲットとした《貧民に特殊な心理》というものは本当に存在しうるのだろうか。もし存在するとすれば、当時の貧民とはどのような人々だったのか。賀川が貧民窟へ入って間もなくの論文には、「彼等は小さい五つ六つの時に両親と離れ、貧民窟から貧民窟、機械の下から機械の下へと潜って来て、今日まで妻もよう持たず金もよう拵へず…」という記述がある⁽²⁸⁾。つまり、貧民とは貧民窟の単なる居住者ではない。2012年現在の知見では、人間は子ども時代に放置され十分な養育環境にない場合、発達障害と見なされるような行動パターンをとりうる可能性がある。すなわち、生活環境によって誰にでも一定の行動特性が発現しうるのであって、こ

の観点からすれば、『貧民心理の研究』に記述される貧民窟の人々の行動パターン、その心理的特性なるものは百年後のわれわれにも十分に理解でき納得できるものとなる⁽²⁹⁾。そして、このことは、『貧民心理の研究』における賀川の記述の信頼性の高さを示すとともに、貧民の心理的特性に根拠をおく救済策の探究そのものが現在の水準に照らしても一定程度の妥当性をもちえたことを示しているのである。すなわち、「貧民の犯罪…殊に人殺しするものは、…激昂すると全く性格が分裂してしまつて何が何やらわから無いのである。貧民窟の子供の激越性は…それこそ手のつけ様の無い程放縦なものである。それが心理的アウトマチックモーション【オートマチック・モーション】(自動感応運動)で、活動を開始するものであるから、実に厄介である。之は今日の貧民救済が心理的救治をまたなければならぬ点である」(『貧民窟十年の経験』1919(大正8)159p)。

さて、今後の賀川は、貧民窟の人々をさらに《労働者》と狭義の《貧民》に分類し、セツルメントを人々の組織化を支援するための後方基地・教育機関・寄合場所として位置づけた上で、協同組合運動による社会事業(生活支援サービス)の社会化を構想していくだろう。この貧民支援の具体的な戦略についてはもはや稿を改めざるをえないが、最後に、賀川の実践家ならではの二つのアドバイスを確認して本稿を閉じたいと思う。…「貧民生活の急迫に会ふたものは大抵神経衰弱にかゝる。それでその人々の間に住んで居る人もいつと無くそれに感染するのである」。だから、「そこは注意して自ら外に出て休養してくる必要がある。私はそれを強く感じて居る」。「もう一つの危険は高慢になることである。みな貧乏であるのと、皆無学である為に、ついつい高慢になることは、貧民窟改良家の危険である。それで私は…自らが、貧民窟に全く溺れ無い様に努めて居る」(『貧民窟十年の経験』1919(大正8)163p)。

注

- (1) 日本でケースワークが本格的に検討されるのは1924(大正13)年の三好豊太郎「『ケースワーク』としての人事相談事業」『社会事業』8(7)に始まるという指摘があるが、賀川豊彦の実践はそれ以前、既にソーシャルワークが実践されていた可能性を示す事例となるだろう。小池桂『占領期社会事業者養成とケースワーク』学術出版会、2007年、25p。

- (2) 念頭にあるのは思考の水準における歴史的諸条件であって、心理学、社会学、経済学、労働科学、犯罪学、統計学から、貧困研究、進化思想、社会思想、優生思想、そして被差別部落論、酒害論等々に至る当時の議論、知見、理論モデル、理論水準および社会一般の通念などである。フーコー『言葉と物』新潮社、1974年、あるいは近藤哲郎「監禁の〈実践〉と狂気の〈経験〉－『狂気の歴史』第1部2章「大いなる閉じ込め」の方法と論理」『関西福祉大学研究紀要』9、2006年を参照。
- (3) 「貧民窟物語」『開拓者』14(6)、1919年、21p(『賀川豊彦全集21地殻を破って』に「貧民窟と私」と改題して所収、50p)
- (4) 賀川が貧民窟へ入った動機については、「貧民窟十年」『賀川豊彦全集21地殻を破って』62p、「隣人運動に就いての感想－シカゴ・ハル・ハウスの思い出」『女性改造』2(8)、1923年、17p等を参照。また、『化身主義』に関する推測は、賀川豊彦「現代傾向の哲学(1910)」『雲の柱』(賀川豊彦記念松沢資料館)26、2012年、76p～77p。また、近藤哲郎「『貧民心理の研究』と1910年の賀川豊彦」『雲の柱』26、8pも参照。
- (5) 「貧民窟物語」24p～25p(『賀川豊彦全集21』52p～53p)。《貧民窟の生活法》は〈貧民窟の人々の生活法〉とも〈賀川が貧民窟で生き抜くための生活法〉ともとれるが、いずれにせよ貧民窟の人々を知りたいということには変わらないだろう。
- (6) 「狂(くるひ)」『賀川豊彦初期史料集』394p～395p(『賀川豊彦全集20涙の二等分』5p～6p)。
- (7) 「狂熱伝道者覚悟(1910)」および「救霊団年報第二号(1911)」、いずれも『賀川豊彦初期史料集』400p、1111p。
- (8) 『賀川豊彦初期史料集』430p。この資料については山田明「1910年代貧民街における障害者の生活形態」『共栄学園短期大学研究紀要』3、1987、100pの注(13)から示唆をうけたが、賀川の手稿原本には地名等に誤りがある。幸徳秋水「東京の木賃宿(1904)」『明治東京下層生活誌』岩波文庫1994年を参照する必要がある。なお、1910年～1912年にかけての日記には、これ以外にも、葦合新川の研究(史料集427p)、貧民窟の研究項目(432p)、『感化救済事業講演集』の記事(577p)、けんかの記録(603p～608p)、隣の乞食の日記(612p～614p)、怠惰者の研究(769p～772p)等がある。『貧民心理学』が具体的に構想されはじめるのは日記の上では1912年(764p～765p)のようである。
- (9) 「貧民心理について(一)」『救済研究』5(7)、1917年、708p～709p(『賀川豊彦全集9人間苦と人間建築』129p)、「貧民心理の研究(1915)」『賀川豊彦全集8』所収6p。
- (10) 紙幅の都合上、安料理と慰安については省略した。
- (11) 引用順に、「救霊団年報第二号(1911)」『賀川豊彦初期史料集』1111p、「貧民窟物語(1919)」23p、25p(『賀川豊彦全集21』52p～53p)、「貧民心理の研究(1915)」『賀川豊彦全集8』146p、「貧民窟十年の経験(1919)」『賀川豊彦全集9人間苦と人間建築』159p。
- (12) 「貧民窟十年の経験(1919)」158p、「貧民心理の研究(1915)」149p、同132p。
- (13) 「貧民心理の研究(1915)」42p～43p、「貧民窟十年の経験(1919)」157p、同157p。
- (14) 「救霊団年報第二号(1911)」1111p、「貧民窟物語(1919)」27p(全集54p)。
- (15) 「救霊団年報第二号(1911)」1111p、「貧民窟物語(1919)」22p(全集51p)、「貧民心理の研究(1915)」222p。
- (16) 「救霊団年報第二号(1911)」1112p、「貧民心理の研究(1915)」109p、同167p、同167p、「貧民心理について(三)」『救済研究』5(9)、1917年、957p(『賀川豊彦全集9人間苦と人間建築』134p)。
- (17) 「貧民心理の研究(1915)」253p、「神戸イエス団年報(1929)」『賀川豊彦初期史料集』1117p、「貧民心理の研究(1915)」121p、「貧民心理について(四)」『救済研究』5(10)、1917年、1055p(『賀川豊彦全集9人間苦と人間建築』138p)、「神戸イエス団年報(1929)」1117p。
- (18) 具体的には、さまざまな実践の中でも特に〈他者の行為を導く〉という水準に該当するデータを取り出すという作業である。方法論的にはフーコーに依拠する。近藤哲郎「フーコーの経験的分析手法」『ソシオロジ』1994、39(1)、また、同「フーコーの権力概念と権力分析の構図」『ソシオロジ』1989、34(2)も参照。〈自己の行為を導く〉という水準でデータ分析を試みた例としては、同「貝原益軒の《身を修むる工夫》－『大和俗訓』における自己形成のテクニク」『関西福祉大学研究紀要』7、2004年。
- (19) 議論の都合上引用文献を本文中にまとめて示す。『貧民心理の研究』は全集の、「貧民心理について」は初出雑誌のページ番号である。但し、「貧民心理について」の『賀川豊彦全集9』におけるページ番号は、全集133p～134pという形で(注)に示す。

- (20) 全集 134p ～ 135p.
- (21) 全集 139p ～ 140p.
- (22) アメリカのソーシャルワーカー協会 (NASW) の倫理綱領 (Code of Ethics), いわゆる《専門職の倫理》はワーカーの従うべき道徳的な準則というよりは、むしろソーシャルワークそのものを可能にするための根本的な原則として理解されるべきだが、その5番目の原則が「ソーシャルワーカーは信頼される仕方で行動しなければならない」というものである。地域の人々から「あの人たちに言うたら絶対に解決してくれる」というような信頼を獲得するために「地域で困った問題があれば、必ずすぐに行かなければならない」とする現代のワーカーにも通ずる原則である (コミュニティワーカー勝部麗子氏に対する山本美緒、弓岡美輝の聞きとり調査による)。なお、ソーシャルワークの全プロセスを明確に把握できるような日本語のテキストを寡聞にして知らない。今のところ未完で不十分ではあるが、近藤哲郎「ソーシャルワークの実践スキル体系 (1) ～ (3)」『関西福祉大学研究紀要』11号 (2008), 『関西福祉大学社会福祉学部研究紀要』12号～13号 (2009～2010) には、ソーシャルワークのプロセスにおいてワーカーのとるべき行動パターン (スキル) を逐一示してあるのでご参照いただきたい。また、B.W.Sheafor et al. “*Techniques and Guidelines for Social Work Practice*” もソーシャルワークの実践を実践レベルで具体的に把握するには非常に有益である。
- (23) 同様に、倫理綱領の3番目が「ソーシャルワーカーは人々が本来もっている価値と尊厳に敬意を払わなければならない」という原則である。利用者を単に尊重するというのではなく、尊敬する (敬意を払う) という原則である。利用者の立場になってみれば、自分に敬意を払わない (あるいは侮辱するような) 支援者に自分自身の不安、怒り、悲しみ、困難等について本当のことは言わないだろう。近藤哲郎「ソーシャルワークの実践スキル体系 (1)」50p を参照。
- (24) 『貧民心理の研究』では、『おしか』は親孝行だが淫売を悪いとは思っていないというネガティブな側面で捉えられ、貧民の同情心や相互扶助もむしろその弊害が目まぐるしくされている。「兎に角貧民は同情心が厚い。…彼等の相互扶助の金額は日本全国の慈善資金の幾百倍に当るであらうと私は考へて居る。それで彼等は永遠に頭上りが無い、共倒れの悲劇！之より彼等を上手に救ふてやることも社会改良家の顧みる可き所であらう」(『貧民心理の研究』152p)。また、前掲「ソーシャルワークの実践スキル体

系 (1)」50p ～ 51p を参照。

- (25) 1928 (昭和3) 年度の事業報告では、このケースワークとコミュニティワークのそれぞれについて、イエス団友愛救済所《人事相談部》および《調査部》の実践として成果が公表されている。ソーシャルワークが意識的かつ体系的に実践されていたことは間違いないだろう。「神戸イエス団年報 (1929)」『賀川豊彦初期史料集』1117p.
- (26) 賀川が貧民窟へ入った頃の実践モデルは、移住6か月目に脱稿した「現代傾向の哲学 (1910)」にある看守の実践、すなわち、その心理的特性ゆえに刑罰では犯罪動機を阻止できない青年犯罪者に対して、「真に個性を愛する看守は自ら柿色の衣を着て、囚人と共に労働し、共に寝、共に笑って如何に日常生活を送るべきかを知らしむ」(39p ～ 40p) というようなものではなかったか。それがなぜ現代的なソーシャルワークへと転回したかは未だ明確ではないが、文獻的には1918 (大正7) 年の「貧民窟殖民事業に就て」『賀川豊彦全集 8 精神運動と社会運動』にはじまるセツルメント研究の結果として考えるのが今のところ穏当だろう。
- (27) 「貧民間に犯罪の多いのと、其心理が特殊なのは云ふまでもあるまい」。「現代傾向の哲学 (1910)」38p.
- (28) 同 77p.
- (29) 念頭にあるのは今で言う自閉症スペクトラム、ADHD の行動特性・身体特性である。品川裕香『心からのごめんなさいへー一人ひとりの個性に合わせた教育を導入した少年院の挑戦』中央法規出版、2005年を参照。たとえば、一般には最も意外でかつ極端なケースに思われるが、『貧民心理の研究』では痛覚の鈍るのは精神病患者の特長とした上で、「栄吉と云ふ子供などはそれである。私が栄吉の手に針を刺して見たが、彼は余り疼痛を感じ無かった。彼は本年十六歳の不良少年で、盗癖のある少し馬鹿である。…孤児で有って、放浪癖がある。屑拾ひを職業にして居た」という記述がある。しかし、2012年現在アスペルガー (自閉症スペクトラム) の支援にあたる専門職も『痛い』という感覚の一般との相違について同様の指摘をしている。田井みゆき『パスポートは特性理解』クリエイツかもがわ、2009年、24p. もちろん、当時の貧民窟にはそのほかにもさまざまなハンディキャップをもつ人々が居住していたことは賀川もくり返し指摘するところである。